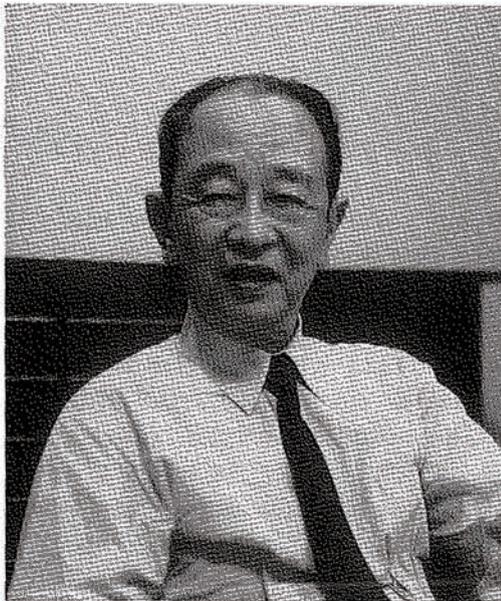


追悼 神代雄一郎



神代雄一郎 略歴

1922年 4月2日 東京生まれ
 1944年 東京大学第二工学部建築学科卒業
 同大学院特別研究生として近代建築史を専攻
 1949年 明治大学助教授
 1961年 工学博士 学位論文「近代建築思潮形成過程の研究」
 1962年 明治大学教授
 1965年 アメリカ留学（～68年）
 1993年 明治大学 定年退職 明治大学名誉教授
 2000年 10月30日永眠 享年78歳

主な著述

1953年 『マッキントッシュ：近代建築シリーズ』彰国社
 1958年 『ヨーロッパおよびアメリカにおける近代建築思潮の形成』（『建築学大系・6』）彰国社
 『現代建築と芸術』彰国社

1963年 『近代建築の黎明』美術出版社
 1964年 『日本のかたち』写真：二川幸夫 美術出版社
 1965年 『現代建築拜見』井上書院
 1967年 『日本建築の美／伝統と創造』井上書院
 （編集）『現代建築を創る人々／匠時代のあとにくるもの』鹿島出版会
 1971年 『コミュニティーの前後』井上書院
 1973年 『アメリカの環境／都市・建築・芸術』井上書院
 1974年 『棲みかか条件』井上書院
 1975年 『現代建築の読み方』井上書院
 1979年 『原色 現代日本の美術 17・建築』小学館
 1980年 『日本の庭園 7・現代の名庭』講談社
 1983年 （共訳）『木のころ』鹿島出版会
 1986年 『日本の美術 244・日本建築の空間』至文堂
 1999年 『間・日本建築の意匠』鹿島出版会

「文化の香りがしないね」と就職先についてコメントされ、ついに博士課程満期終了を過ぎてまで、私は明治大学の神代研究室にすることになりました。課程を修了し、助手補という肩書きでいた1983年に建築家前川國男の秘書になりました。これについて神代先生が何と言われたかよく覚えていませんが、「前川國男のような建築家が10人いれば、建築界も変わっただろうね」と言われたことは、当誌に4年前に書きました。

私が明治大学工学部建築学科の歴史意匠研究室の神代研究室に入ったのは、1975年の大学4年のゼミ生としてで、年表を見ると先生は53歳だったこととなります。以来、先生の印象は、昨年お会いしたときに少し年を取られたなという程度で、ほぼ変わってはいません。

神代研究室は、故堀口捨己の研究室を継ぐもので、先生から堀口捨己については、とくに年1回の古建築実習という京都・奈良の旅行のときに、関西での逸話をよく聞かされました。

明治大学で神代雄一郎という先生の存在を知ったのは、大学3年のと

きの歴史意匠の授業「日本のかたち」からです。毎回日本にもこんなに美しい伝統的な意匠の手法があるのかと単純に感激して、次の年に歴史意匠の神代ゼミに入ったわけです。

神代研究室では、当時はやりのデザイン・サーヴェイをやっていて、私がゼミ生の夏には香川県の引田町というハマとオカをつなぐ町並みを調査しました（『引田におけるオカとハマ』雑誌SD、1976年2月号）。私の調査対象は、かめびし屋という大きな造り醤油屋で、修士課程の先輩の助手として汗だくになってノートに家屋などの寸法をとったものです。

私の修士課程（1976～77年）のときは、1967年から研究室で始めたデザイン・サーヴェイ（当時の助手松本勝邦氏）のまとめの、博士課程（1978年～）のときは先生が著す『原色 現代日本の美術 17・建築』や『日本の庭園 7・現代の名庭』の資料づくりなどの手伝いをしました。

印象的なことは、1981年に彫刻家イサム・ノグチの四国のアトリエで行なわれた、彼と木匠ジョージ・ナ

カシマと神代雄一郎との鼎談に同行したことで、本物の芸術家の瑞々しさに触れさせていただきました。このご縁から、のちに先生との共訳でジョージ・ナカシマ著『木のころ』を出版させていただきました。

1983年からは、後輩の松崎照明氏（工学博士）が先生を手伝い、晩年の力作『日本の美術 244・日本建築の空間』を1986年にまとめておられます。一昨年は、77歳の喜寿の祝いのためにこれと1969年に書かれた「九間（このま）論」（雑誌SD）をまとめて『間・日本建築の意匠』（SD選書235）として出版されました。喜寿の祝いの会の前に、先生から「体調不良のため中止」とのハガキが舞い込み、さっそくお目にかかるそう悪そうにもないご様子でした。ご家族にも最後まで弱音を吐かず、淡々と逝かれたそうです。延子夫人曰く、「神代は、20世紀の終わりに自ら幕を引きました」。

日本の建築意匠という感性を教えてください、ほんとうにありがとうございました。

心よりご冥福をお祈りいたします。（神代研究室24回生 佐藤由巳子）